

# 歴史を歩く (25)

## 『戦国時代の群像』

### 第十話 戦ヶ島の戦い



天文22年（1553年）日向の伊東義祐が、飢肥の島津忠親（豊州島津家第5代当主）を攻めると、これに必ずるかのように、高山城主肝付兼統は忠親の属城である志布志城を攻めた。この年、肝付兼統は嫡男の良兼に家督を譲って隠居したものの、実権は握り続けていた。

天文23年（1554年）8月18日、志布志城を守っていた齋武清が肝付氏の属城である竜相城に報復攻撃を仕掛けてきた。この時、竜相城を守っていたのは薬丸弾正兼持という若い武将であった。

薬丸家は、もともと肝付氏の分家であり、代々肝付家の家老を努めていた。また肝付家伝の剣法「野太刀」（『薬丸自顕流』の源流とされる）

を伝えていた。薬丸兼持の父は薬丸兼将、またの名を薬丸孤雲（湖雲）と言ひ、戦国期屈指の名将であった。また兼持の子薬丸兼成は、野太刀の使い手として名高く、後に示現流の開祖となる東郷重位が初陣の時に、彼の介添え役を務めている。

ちなみに救仁郷断二著『大崎町史』では、薬丸弾正「兼将」としているが、薬丸弾正は「兼将」として、父を「兼郷」とする説も存在する。

齋武の天文23年（1554年）の竜相城襲撃では、薬丸兼持は城外に出てこれを迎え撃ち、撃退に成功したが、2年後の弘治2年（1556年）8月17日、島津忠親は大群を率いて、再び攻め寄せてきた。当時海上交易の要所の一つであった大崎の地を手中に置くことは、肝付

氏にとつても、豊州島津氏にとつても大隅半島における覇権を獲得するのに不可欠であったのである。それだけ重要な竜相城の地頭に就いた薬丸兼持もまた、若き武将でありながら父親ゆずりの名将であったことがうかがえる。

戦ヶ島の戦いは凄惨を極めた。肝付方は一旦益丸一帯で島津氏の大群を迎え撃った。この時薬丸兼持は、島津方の武將大野出羽守と一騎打ちを挑んだと『大崎名勝誌』に記されている。

大野出羽守については、不明な点があつて、彼は天文15年（1546年）から肝付領となつた蓬原の地頭である。「蓬原外城始終由緒覚」にも、天文18年（1549年）の記録で蓬原地頭として大野出羽守の名が記されている。これらの記録から、天文18年には少なくとも、大野出羽守は肝付の配下にあつたようにも受け止められるが、そもそも大野出羽守が島津一族であることなどを含め、検証の余地がある。

薬丸兼持は、この時の戦で戦死した。享年22才であつたと言われている。彼のものと伝わる墓は、今も後迫集落にある墓地の一角に残っている。一方、大野出羽守は兼持の一騎打ちで瀕死の傷を受け、下益丸で自害して果てたという。彼の墓は現在も地元の方によつて守られている。

この戦いで肝付方は約300名以上が戦死し、島津方も50名以上の死者を出した。戦死者によつてわたうち川（田原川下流域）は、鮮血に染まり、遺体で川が堰き止つたと言う。

結局、薬丸兼持率いる肝付軍の命を賭けた迎撃によつて、島

津忠親は竜相城を落とすことはできなかった。

現在、戦ヶ島古戦場跡の田んぼの中に、百引城主猪鹿倉丹後守の墓がぼつんと建っている。彼もまた、戦で命を落とした武將の一人である。この時期、青々と茂つた稲穂を背景にした猪鹿倉丹後守の墓を見ると、ふと松尾芭蕉の有名な句が頭をよぎる。

—夏草や

兵どもが 夢のあと—

（大崎町教育委員会内村憲和）



▲『薬丸弾正兼持の墓』



▲『大野出羽守の墓』